阿志岐古墳群Ⅱ

阿志岐古墳群Ｂ群26号墳の調査

筑紫野市文化財調査報告書

第　12　集

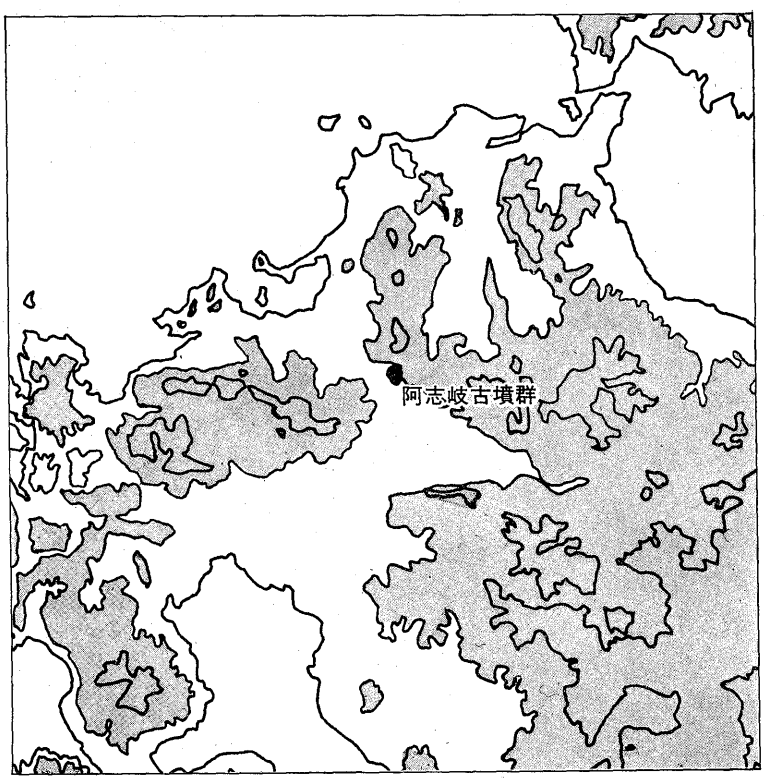
1985

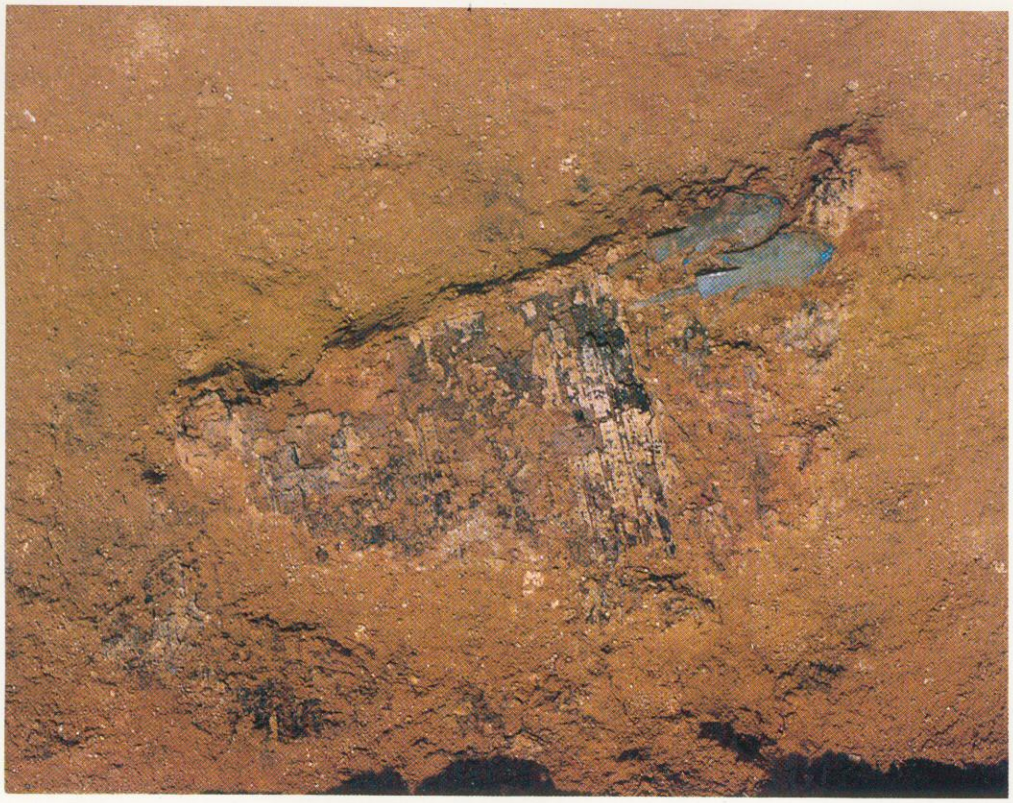
筑紫野市教育委員会

阿志岐古墳群 Ⅱ

あしき

阿志岐古墳群Ｂ群26号墳の調査





靱　出　土　状　況

序

阿志岐古墳群は、筑紫野市の歴史の中でも特筆すべき古墳時代の遺跡だと思っておりましたが、最近採土工事によって崩壊の危機に達しましたので、当教育委員会で緊急発掘調査をしました。

本書はその調査結果を纒めたものです。調査内容も30本になりなんとする銅鏃や鉄鋸など貴重な文化財が発掘され，九州でも有数の遺跡と自負しております。

発掘調査に従事された各位の労をねぎらうと共に、御指導、御助言をいただいた先生方や地元で協力いただいた方々に深謝申し上げる次第でございます。

昭和60年３月30日

筑紫野市教育委員会
教育長　松田　康男

例　　言

1．この報告書は、筑紫野市大字阿志岐に所在する阿志岐古墳群Ｂ群26号墳の発掘調査報告書である。

2．調査は筑紫野市教育委員会が昭和59年度国庫補助を受けて実施した。

3．現地での実測および写真撮影は、主に奥村俊久が当り、山野洋一の応援を得た。

4．遺物実測及び写真撮影は奥村が担当した。

5．本書の執筆・編集は奥村が担当した。

目　　次

頁

Ⅰ　調査にいたる経過……1

Ⅱ　位置と環境……1

Ⅲ　調査の内容……6

1．調査概要……6

2．墳　丘……6

3．内部主体……8

4．遺物の出土状況……8

5．出土遺物……10

6．集　石……13

Ⅳ　ま　と　め……16

Ⅰ　調査に至る経過

昭和56年度、筑紫野市教育委員会は阿志岐古墳群Ｂ群21～25号墳を採土工事に伴い発掘調査を実施した。それから３年を経て、採土が本墳に迫ったため、事前に発掘調査を実施する事となったが、業者への再三にわたる申し入れにもかかわらず採土は続行された。その結果、調査着手前に墳丘の一部が削り落とされ、調査中にも主体部中央を横断するき裂が入るなど、危険な状況下での調査であった。

発掘調査は筑紫野市教育委員会が調査主体者となり、昭和59年４月17日より５月17日まで現地での発掘調査を実施し、同年11月19日より11月24日まで遺物整理を行なった。

調査組織

総　括

筑紫野市教育委員会　教　育　長　松田　康男

庶　務

同　社会教育課課長　山村　茂

同　社会教育係係長　豊福　茂美

同　社会教育係主事　山野　洋一

発掘調査

同　同　奥村　俊久

なお６月１日をもって文化財係が設置され、これ以降は一部下記のとおりの体制で事業に当った。

社会教育課　文化財係係長　高原　健

文化財係主事　山野　洋一

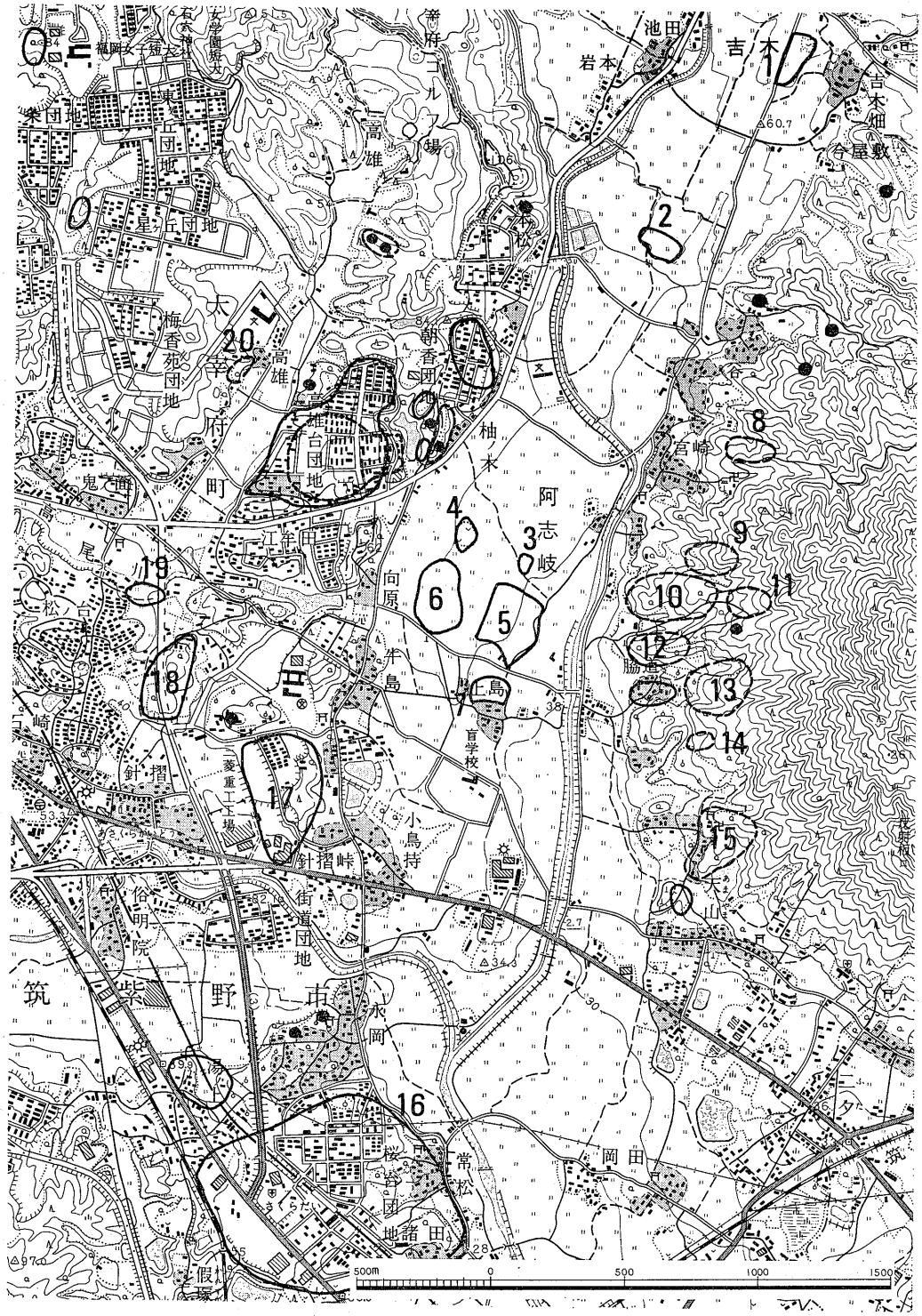
同　奥村　俊久

発掘調査中、実測および写真撮影について山野洋一主事の応援を得た。また、出土遺物の取り上げ、保存処理は県立九州歴史資料館学芸第二課技術主査横田義章氏に、鉄鋸のＸ線写真撮影については県立北九州工業試験場技術振興課材料強度研究室専門研究員松田弘道氏にお手をわずらわせ、出土遺物については北九州市立考古博物館館長小田富士雄先生より御助言をいただいた。ここに記して感謝する次第です。また報告書作成にあたり、長野智恵子、鶴味加代子の協力を得た。

Ⅱ　位置と環境（第１～４図、図版１－１）

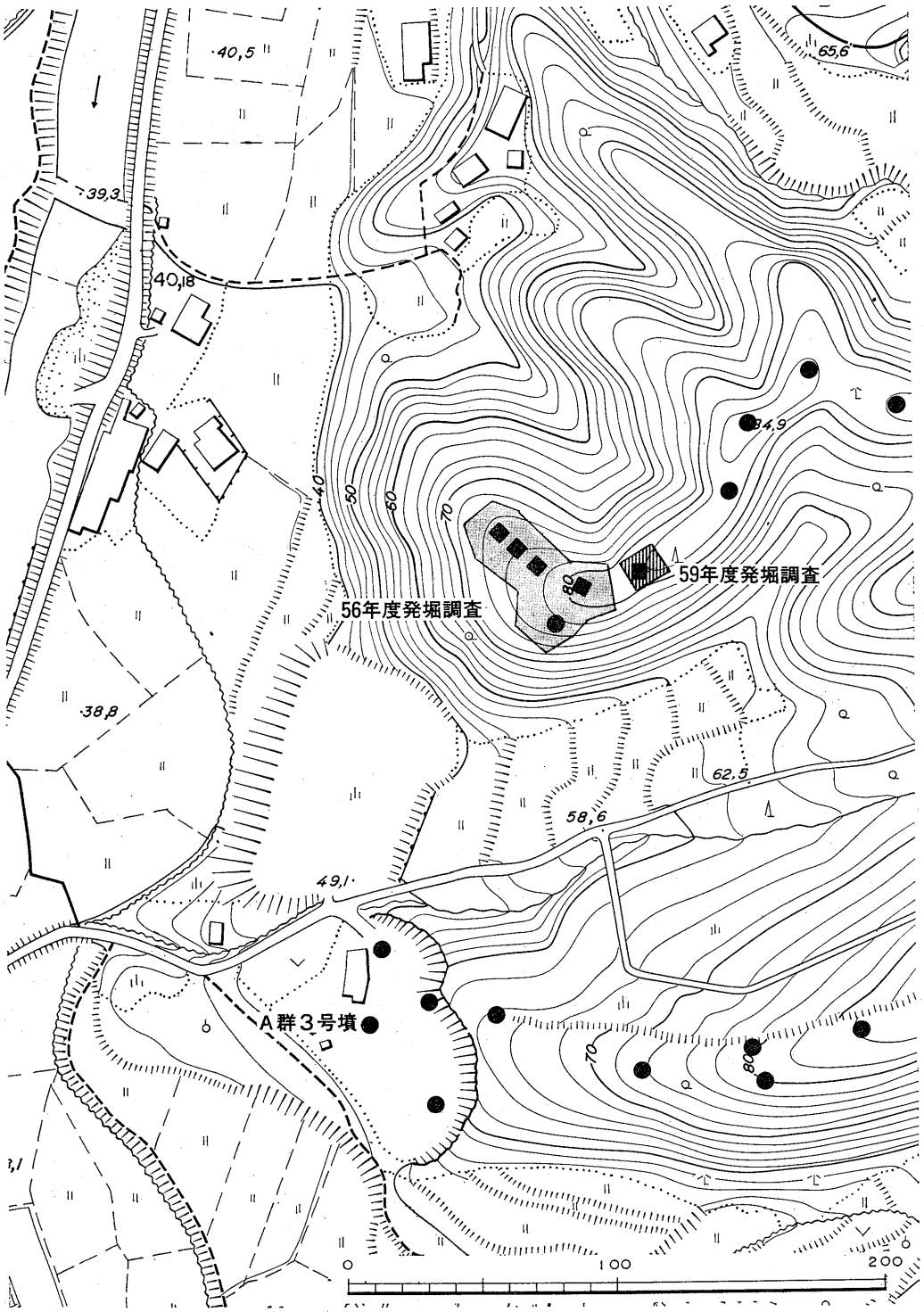
本遺跡は、福岡県筑紫野市大字阿志岐に所在する。

市の東部には筑後川の支流である宝満川が流れる。宝満川は三郡山に源を発し、その東麓を

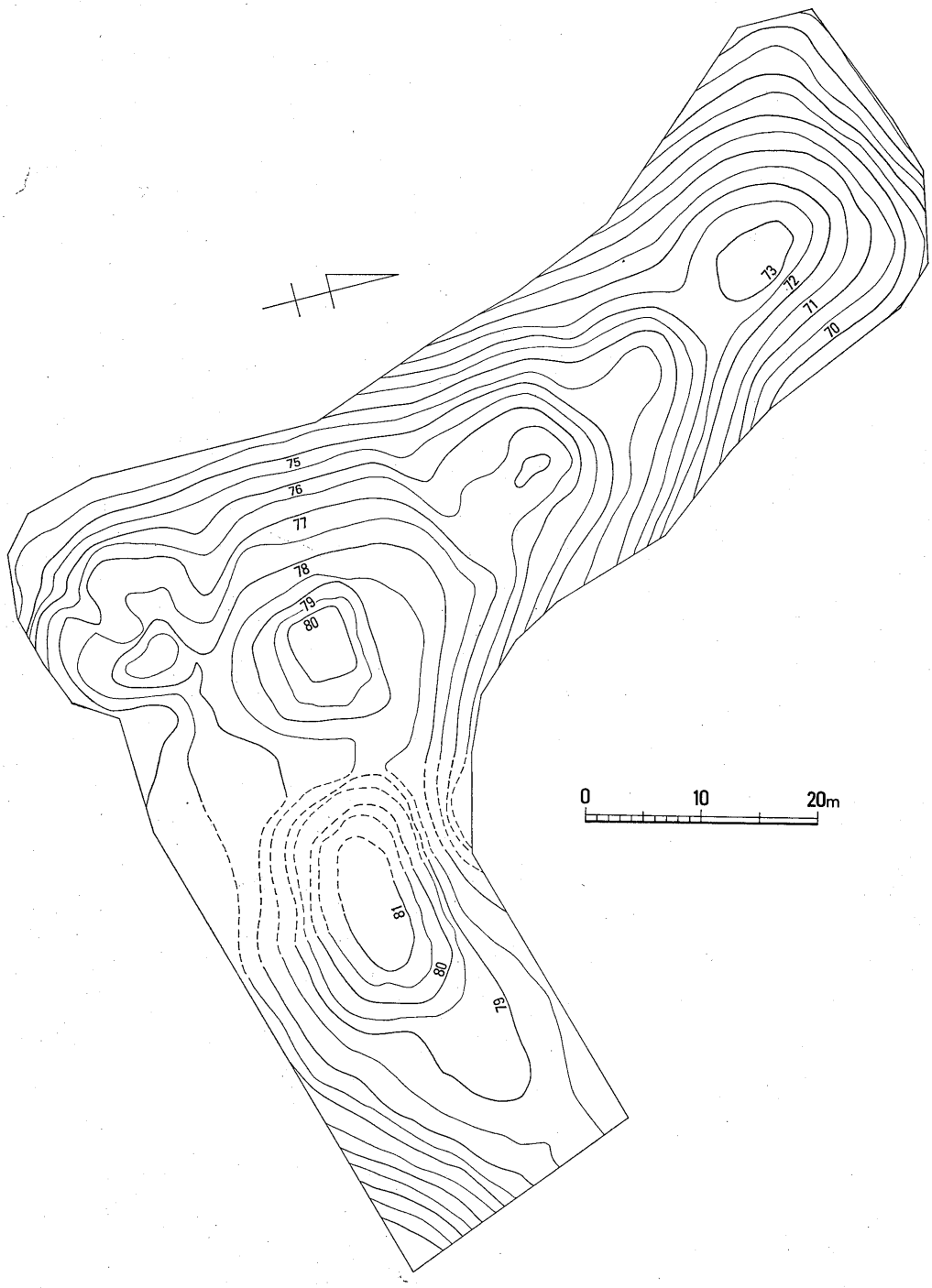


第１図　阿志岐古墳群周辺古墳時代遺跡位置図（縮尺1/25,000）

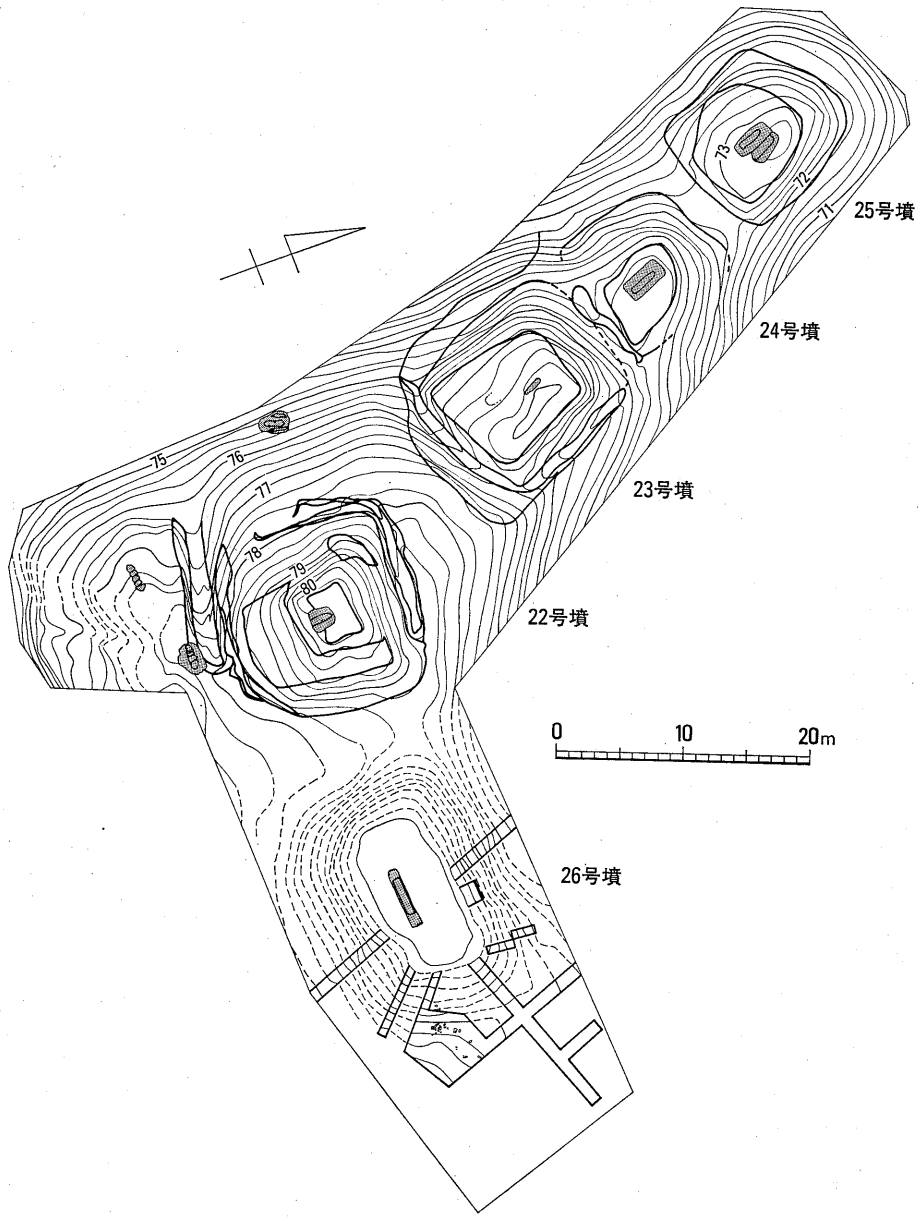
①御笠地区遺跡Ａ地点　②御笠地区遺跡Ｂ地点　③御笠地区遺跡Ｄ地点　④御笠地区遺跡Ｃ地点　⑤御笠地区遺跡Ｆ地点　⑥御笠地区遺跡Ｅ地点　⑦御笠地区遺跡Ｇ地点　⑧杉の谷古墳群　⑨阿志岐古墳群Ｄ群　⑩阿志岐古墳群Ｂ群　⑪阿志岐古墳群Ｃ群　⑫阿志岐古墳群Ａ群　⑬脇道古墳群　⑭老松神社古墳群　⑮天山古墳群　⑯常松遺跡　⑰峠山遺跡　⑱野黒坂遺跡　⑲大曲遺跡　⑳菖蒲古墳群　他は古墳及び古墳時代の遺跡を示す。


40,5
39,3
40,18
65,6
34,9
40
50
60
70
80
59年度発堀調査
56年度発堀調査
38,8
62,5
58,6
49,1
A群3号墳
70
80
0
100
200

第2図 遺 跡 付 近 地 図



第３図　阿志岐古墳群Ｂ群21～26号墳地形測量図（縮尺1/600）



第４図　阿志岐古墳群22～26号墳墳丘測量図（縮尺1/600）

回り込むようにして山間をぬけた後、両岸に肥沃な沖積地を形成する。この中流東側にある宮地岳（標高339m）には、現在80基程度の古墳が確認されているが、実数はその数倍にのぼるものと思われる。これらの古墳は群集し、いくつかの古墳群を形成しており、宮地岳西麓には北から杉の谷古墳群、阿志岐古墳群、脇道古墳群、老松神社古墳群、天山古墳群がある。これまで、横穴式石室をもつ杉の谷古墳群１～３号墳[註1]、竪穴系横口式石室をもつ阿志岐古墳群Ａ群３号墳[註2]、横穴式石室の阿志岐Ｂ群21号墳[註3]、割竹形木棺と推定される阿志岐Ｂ群22～25号墳[註4]が発掘調査された。今回の調査対象である阿志岐古墳群Ｂ群26号墳は、先のＢ群22号墳の上方脇にあり尾根先端の最も高い位置に築造されたものである。墳頂部からは阿志岐周辺の平野[註5]が一望され対面する丘陵には７基の内部主体をもち方格規矩鏡などを出土した菖蒲１号墳[註6]や、方形・円形周溝墓からなる峠山遺跡[註7]が所在する。

註

註１．「杉の谷古墳群・カケ塚古墳埋蔵文化財発掘調査報告書」筑紫野市文化財調査報告書第２・３集　1979　筑紫野市教育委員会

註２．「阿志岐シメノグチ遺跡」筑紫野市文化財調査報告書第１集　1972　筑紫野市教育委員会

註３．「阿志岐古墳群」筑紫野市文化財調査報告書第７集　1982　筑紫野市教育委員会

註４．註３に同じ

註５．昭和52年度より御笠地区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査が、この平野一帯で実施され、弥生時代末から古墳時代に至る住居跡などが数多く検出されている。

註６．「菖蒲古墳の調査　昭和50年度」太宰府町の文化財第１集　1976　太宰府町教育委員会。

註７．小田富士夫『西日本における発生期古墳の地域相』「古文化談叢第４集」　1978　九州古文化研究会　―北九州―

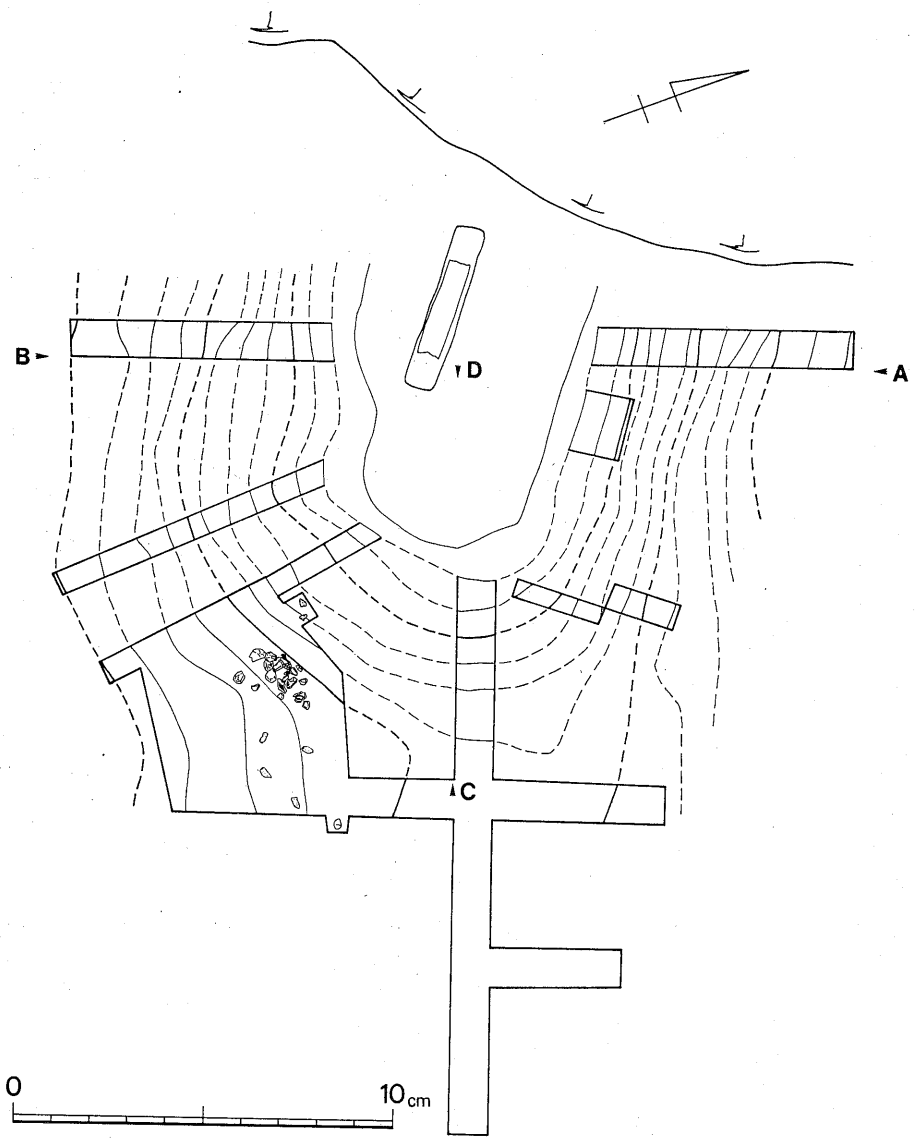
Ⅲ　調査の内容

1．調査概要

調査は採土によって墳丘の一部が削り落とされ、危険な状態にあるため、対象を墳丘の半分に絞った。また、墳丘頂部で土地所有者が変わっており、植林が行なわれているため極力この木を避けてトレンチを設定し、調査を行なわざるをえなかった。

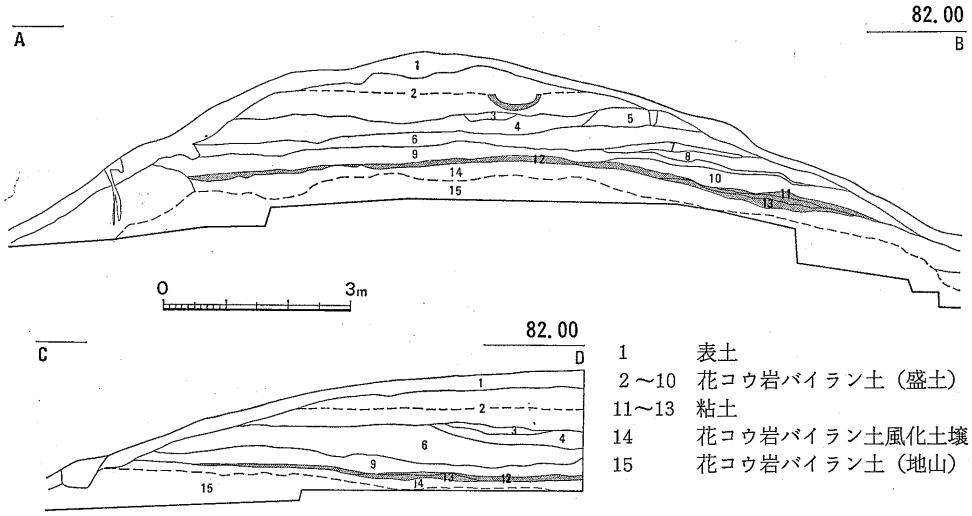
2．墳　丘（第５・６図、図版１―１・２―１）

古墳は標高約79mの所に築造される。墳丘は内部主体を中心にして復原してみると、東西20m、南北17mほどの長方形を呈す。このことはＢ群22～25号墳の調査時に実見した際にも感じられた。南北は墳丘端部からそのまま谷部へ続く自然傾斜面となっている。東側はＢ群22号墳



第５図　阿志岐古墳群Ｂ群26号墳墳丘測量図（縮尺1/200）

と接するが、西側は狭い平坦面を有し、やや距離を置いて横穴式石室を内部主体とするＢ群26号墳へ続く。立地的に尾根先端のやや高まった部分の裾周辺を削り出し、土盛したと考えられ旧地表の上に粘土を敷き、その上に土を積む。土は全て花崗岩のバイラン土壌で、数度にわたり厚く盛られ、粗い土盛りでしまりも弱い。



第6図　墳　丘　断　面　図（縮尺1/120）

3. 内部主体（第7図、図版2－2・3）

墳頂部から約60cm下げた所で、粘土や内部に詰められていた朱を確認した。

棺は断面が舟底状を呈す痕跡が見られる事などから、割竹形木棺と推定される。棺の模規は長さ250cm、幅70cmを測り、長さ450cm、幅80cmほどの墓壙内は、棺の周囲を固めた粘土で埋まる。棺の両端は粘土が段状に窪む。

4. 遺物の出土状況（図版3）

(1) 墳丘　2層上位の内部主体部東上に位置する部分で多量の土器が出土した。土器は壺や高坏が大半を占め、甕はみられなかった。

(2) 内部主体棺内から鉄剣2振、銅鏃29本、鏃族13本、鉄鏃茎部1本、砥石1個が出土し、棺外西側から鉄鋸、鉄斧各1点が出土した。

鉄剣は木棺軸線に平行して置かれていた。1振は鋒部をに西向け、棺の西部北側から出土した。もう一振は鋒部を東に向け、棺の中央南側で出土した。

銅鏃は1本が棺の真中で、やや浮いて出土した。また、西側の鉄剣の脇下からも1本が出土した。銅鏃の大半は棺の東部南側にまとまっている。大形の2本が靫に入れられた状態で、先を東に向け、棺東端南側で出土した。残りの26本はこの靫と鉄剣に狭まれた所に、先を西に向けて鉄鏃といっしょに束ねた状態で出土した。銅鏃と鉄鏃は、銅鏃の方が下位にあり、東側には靫または矢柄の跡と思われる黒色の腐蝕土が認められる。

棺の西端には木棺軸線に対し斜行する角度で、砥石と鉄鏃の茎部が平行して各1点出土した。

木棺の西側脇で鉄器類がまとまって出土した。木棺軸線に直交し、刃部を南に向けて鉄斧が

出土した。その直上に木棺軸線に平行して鉄鋸が置かれている。また、鉄鏃茎部や鉄片も出土した。木棺東脇からは、靫の破片や鉄鏃茎部が出土した。

5. 出土遺物

土器（第８・９図、図版４―１・９・７・11）

土師器（１～11）いずれも遺存状態が悪く、表面が粗れている。

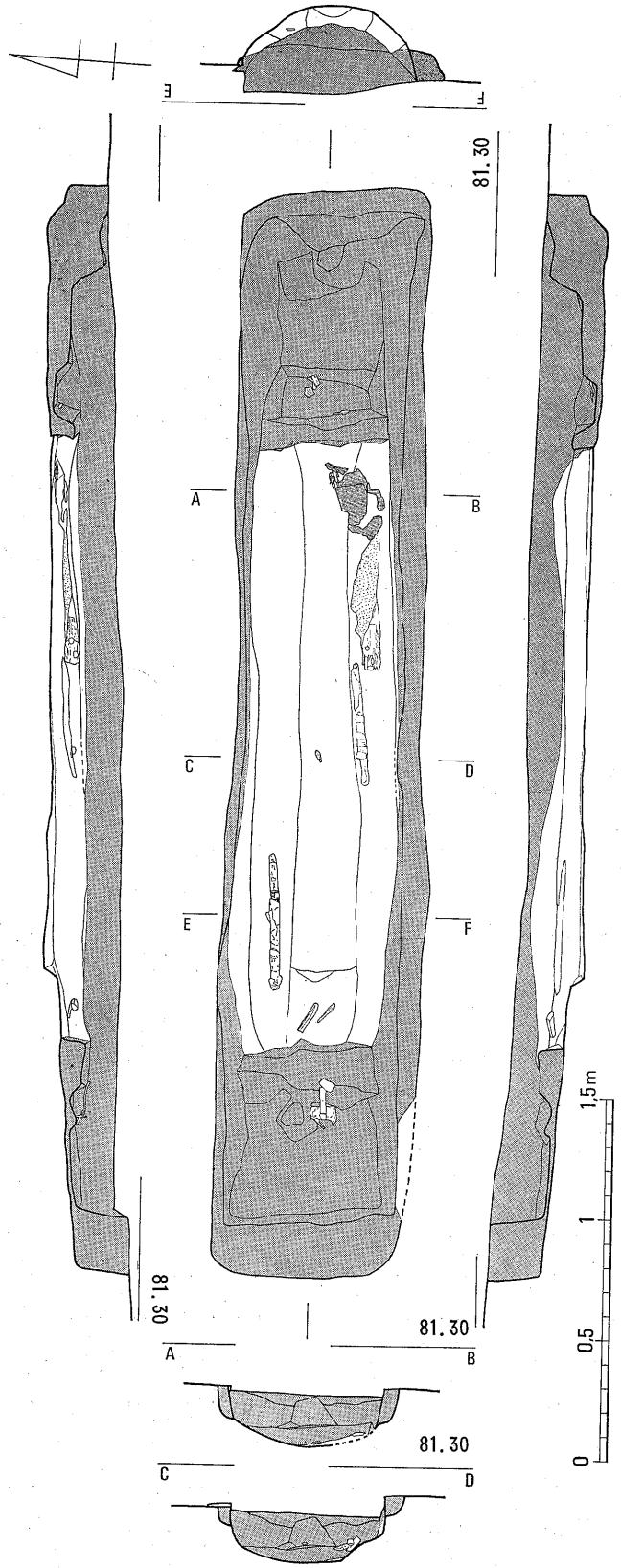
１は直口、または二重口縁壺の胴部であると思われるが、僅かに残る頸部をみると前者の可能性の方が高いと思われる。胴部最大径は26.7cm頸を測る球状を呈す。胴部下半には成形時に段階を置いて粘土を積んだ跡と考えられる僅かな突出部がめぐる。内外面は細かな刷毛目が施され、肩部内面には指頭痕が多く残る。２は直口壺の口縁部の小片である。口径21cm程度で、１の口縁部の可能性も否定できない。口唇部は水平に成形される。３は口径10.2cmと推定される直口壺の口縁部小片である。外面に細かい刷毛目が僅かに残る。４は二重口縁壺の頸部である。他の土器に比べ器壁が厚く、胎土も粗い。５は小形丸底壺の小片で、口径12.6cmに復原される。６は高坏の坏部で、体部中ほどで屈曲し、外反して立ち上るものである。７は高坏の脚部で、脚裾径12.1cm、脚の高さ6.7cmを測る。上半は筒状を呈し、下方で屈曲して裾部に至る。筒部下位の２ケ所に穿孔を有す。筒部内面はヘラ削りされ、屈曲部内面には刷毛目が認められる。６と７は同一個体の可能性が高い。８・９も高坏の坏部である。８は口縁部も欠失する。体部中ほどは屈曲部のなごりのような凹状を呈す。９は口径13.1cm、坏部高3.6cmを測る。体部下位で僅かに屈曲し、上方へ延びる。10は高坏の脚部で、７と同様の形態を示すものと思われる。外面は刷毛目調整後ミガキが施され、内面筒部はヘラ削りされる。11は受け部径10.1cmを測る小形器台で、脚下半は欠失する。受け部は大きく開き、端部は短かく外反して立つ。脚部は直線的に「ハ」字形に開く。脚部内面には刷毛目が認められる。

鉄器・青銅器・石器（第10～12図、図版４～６）

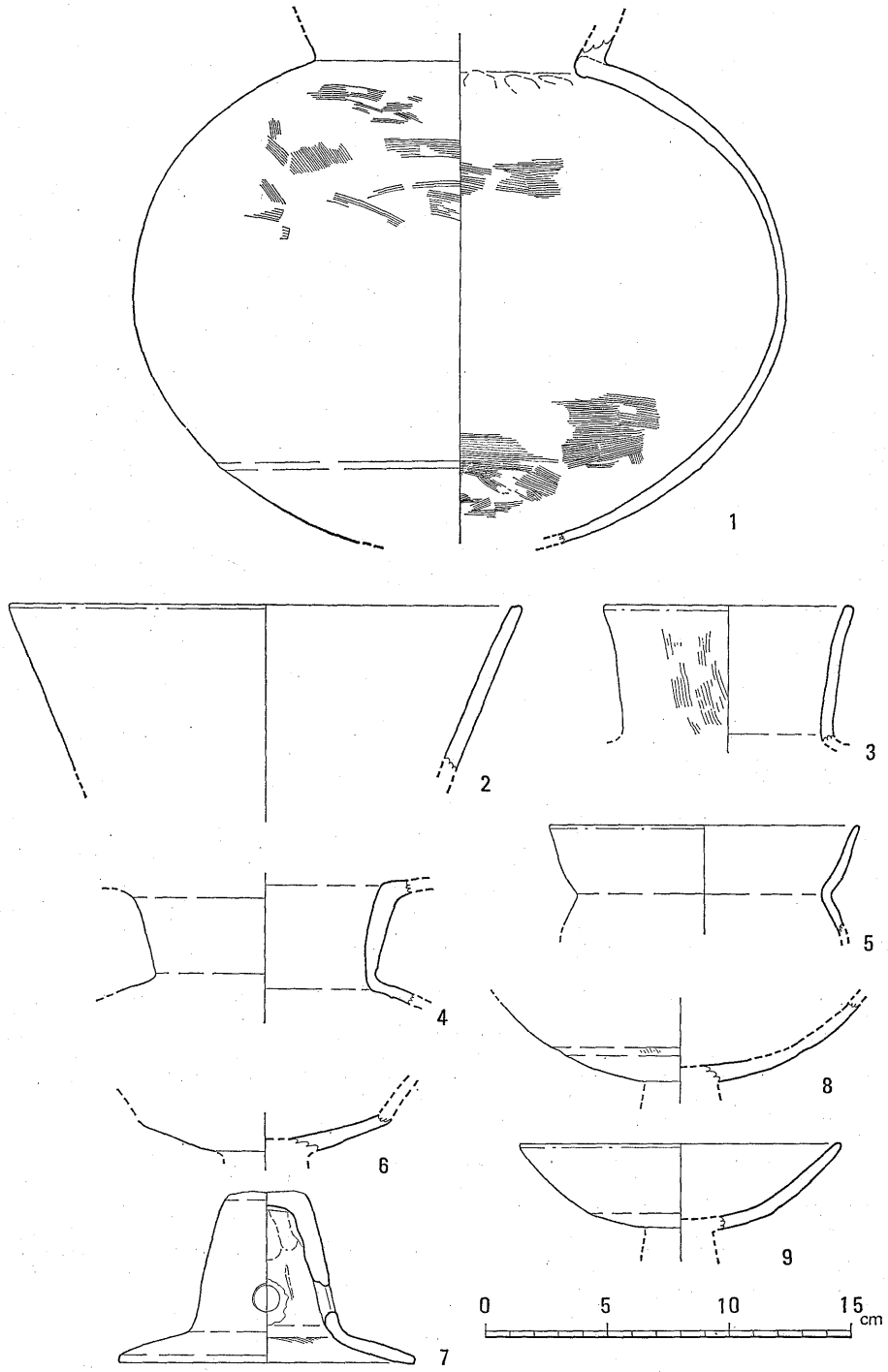
鉄剣（１・２）１は全長48.2cmを測り、把や鞘の木質が遺存する。茎は長さ10cmで、身との比率は約１：４である。身幅４㎜、茎幅３～２㎜を測る。鐔部は腐蝕して明瞭でないが、桜の樹皮様のものをまき、長さ3.1cm、幅1.5cmの断面フットボール形を呈す。２は取り上げ後、茎の復原がうまくゆかず、全長を測定しえなかったが、身は長さ32.5cmで１に比べやや小振りである。幅は身の中ほどで４㎜を測り、茎は目釘の所で3.5cmほどである。

銅鉄（３～31）出土した29本の銅鏃は、大きく５類に分けることが出来る。分類の基準は関の形状など、全体の形態によった。さらにⅣ・Ⅴ類については細分を試みたが、鋳造法や仕上げ研磨の差異によるものも含まれる可能性がある。

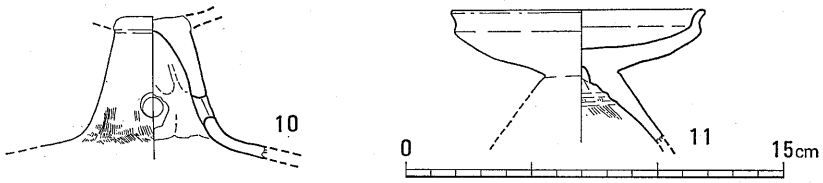
Ⅰ類（３・４）靫に入った状態で出土した大形のものである。外彎気味に開く腸抉をもち、篦被は扁平に研磨され、身の中ほどまで延びる。鎬は篦被の両側を走り、先は三角形を呈し、さらに各角から切先や側刃部に向け三方に延びる。



第7図　主体部実測図（縮尺　1/30）



第8図　出土土器実測図（縮尺1/3）



第9図　出土土器実測図（縮尺1/3）

Ⅱ類（5・6・25）短かく直線的な腸抉をもつもので、身部に縦一条の鎬をもつ。

Ⅲ類（7・8・28）関が中軸線に対し直角に切れるもので、身部に縦一条の鎬をもつ。

Ⅳ類（9～16・26・27・29）関が切先の方向に切れ上るもので、やや外彎気味である。身部に縦一条の鎬をもつ。Ⅳ類はさらに3つに細分した。Ⅳa類（9～14・26・29）は切先に近い位置に最大径をもち、関に近い位置にある括れは比較的はっきりしたものである。13・14を徐きほぼ同じ大きさで、同形態を示す。13は前記の銅鏃に比べ若干大きく、括れも深い。14はさらに大きく、括れは浅い。Ⅳb（15）はⅣaより5㎜ほど長く、関は直線的に切れ上る。Ⅳc（16・27）は関が外彎気味に深く切れ上るものである。切先は鋭角に仕上げられる。

Ⅴ類（17～24・30・31）Ⅳ類と同様に関が切れ上るものであるが、鎬が「十」字状に入る。Ⅴ類はさらに2つに細分した。Ⅴa（17・18）は関が比較的浅く切れ上るもので、Ⅴb（19～24・30・31）は関が深く切れ上るものである。

鉄鏃　（32～43）無茎のものが7点、有茎のもの5点が3・4を除く銅鏃と一括して出土した。32～39は平造り無茎腸抉三角形式に属するものである。いずれも鉄錆著がしく明瞭さを欠いている。基部のくり込みは矩形を呈し、腸抉は細長く延びる。汐井掛遺跡D167[註1]出土鉄鏃や上坂平遺[註2]跡出土の鉄鏃に類例がみられ、これらはX線透視の結果、箆木質の両側に双孔が存在することから、32～39にも双孔を有す可能性が高い。38・40・41、および25～28と32～37に狭まれた3本は箆被平造腸快柳葉式に属するもので、箆被は短かい。42は残存長10cmを測り、砥石と平行して出土したものである。43は鉄斧、鉄鋸などと伴に出土したものである。

鉄斧　（44）全長10.6cm、刃部の幅4.3cm、袋部は3.5cm×2cmの楕円形を呈す。袋部のつくりはよく、接合部は密着している。

鉄鋸　（45）先端を欠失する両歯の鋸である。残存長14cm、幅2.4cm、厚さ1㎜である。端部には目釘穴が1個認められ、周囲に木質が残る。

砥石　長さ13cm、幅2.5cmほどの長方形を呈す。石材は砂岩製である。

靫　植物を編んだもので、さらに漆が塗布される。16cm×11cmほどが比較的良好な沈況で出土したが、他の部分は消失、または飛び散っていた。残りの良い部分は取り上げ、現在は県立九州歴史資料館で処理中であるため、詳細については稿を改めたい。

6. 集　石（第13図図版２－４）

内部主体のほぼ中軸線上、墳丘裾部に集石がみられた。一辺20～30cm大の礫が方形に組まれており、集石下に二段掘りのピットが認められた。ピットの上面プランは約140cm×110cmの円形に近い方形を呈し、さらに床面プラン40cm×30cmの方形プランを有すピットが深られる。ピットは深さ40cm程度で、出土遺物は認められなかった。

註

註１．「若宮・宮田工業団地 関係埋蔵 文化財調査報告第２集」1980　福岡県教育委員会

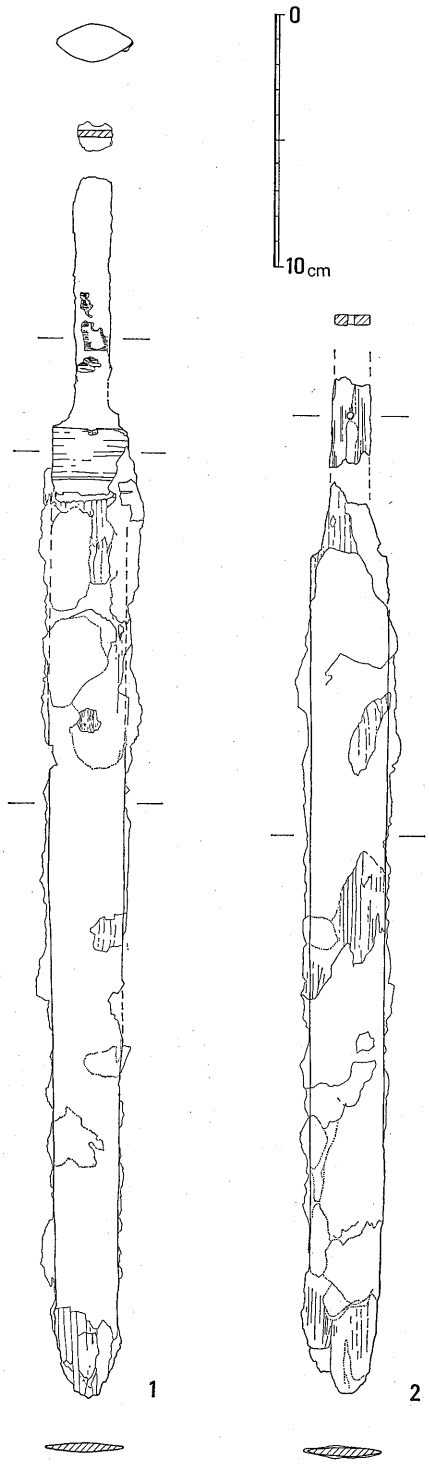
註２．児玉真一『福岡県京都郡豊津町発見の箱式石棺墓と 副葬品』「九州考古学55」 1980　九州考古学会　―福岡―

Ⅳ　まとめ

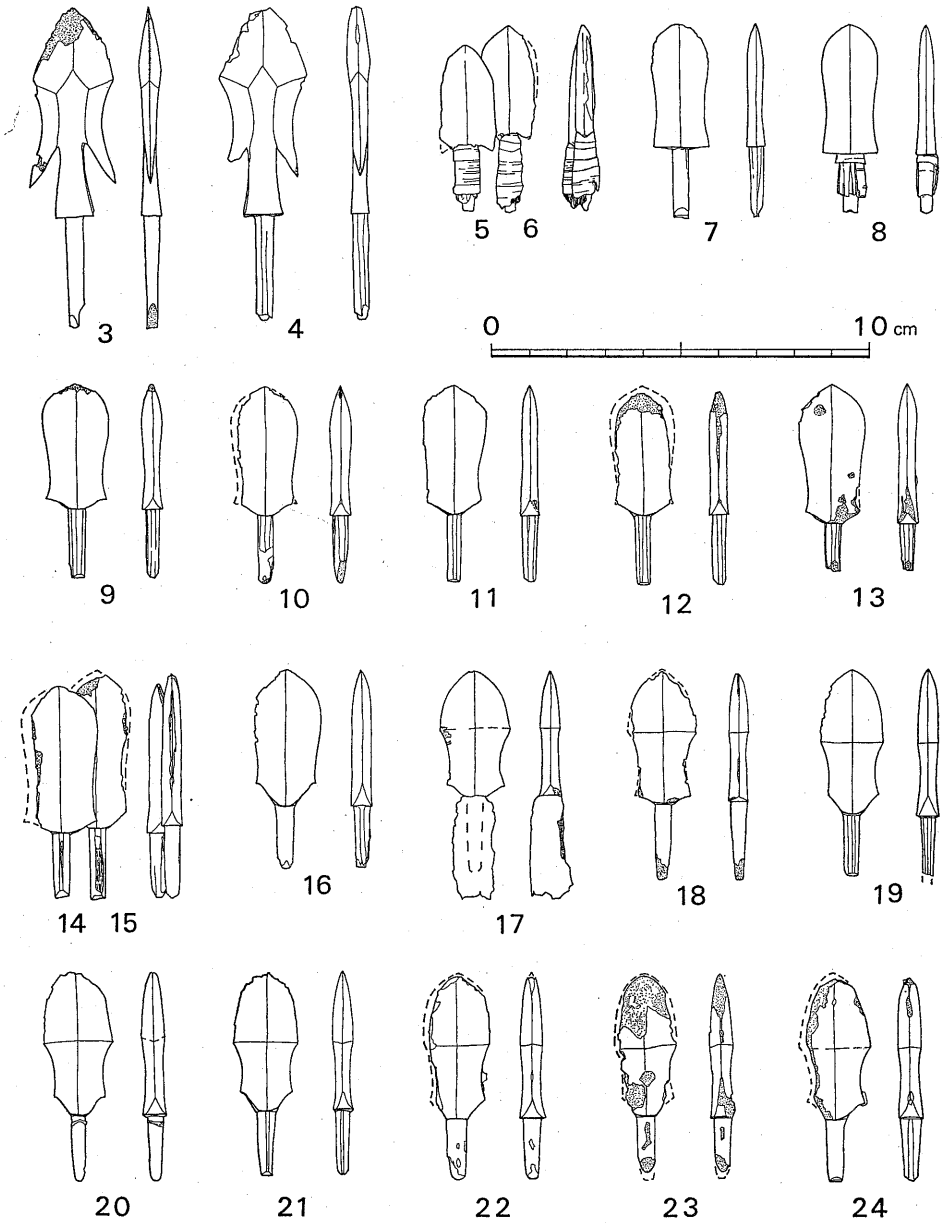
本墳は内部主体は完掘しえたものの、墳丘は半分程度しか残存せず、残存部の調査もトレンチ調査にとどまらざるをえなかった。

墳丘は20m×17m程度の規模と推定される方墳である。築造年代は墳頂より出土した土師器が布留式土器の範疇に収まり、仮に布留式土器を古・中・新と分けるならば、中期段階に相当すると考えられ、４世紀後半という年代を当てたい。

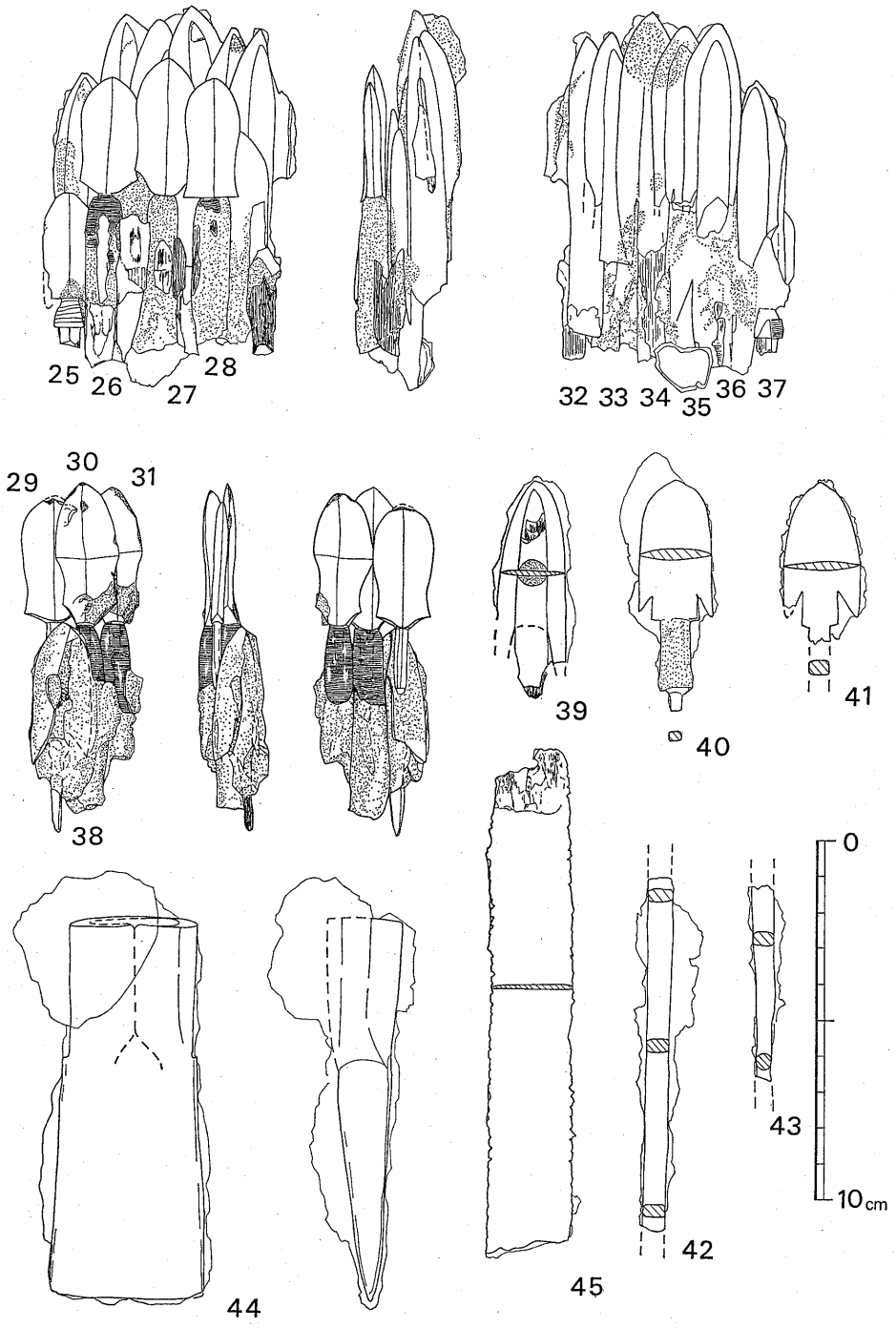
阿志岐古墳群では、本墳のような形態をもつ古墳はＢ群22～25号墳があり、本墳を含め一列にならぶ。中でも本墳は最も高い位置にあり、規模も最大である。副葬品においても22号墳が墓壙より用途不明鉄器１点、23号墳が棺内より刀子１点、23号墳が棺内より鏡片１点などに比



第10図　鉄剣実測図（縮尺1/3）

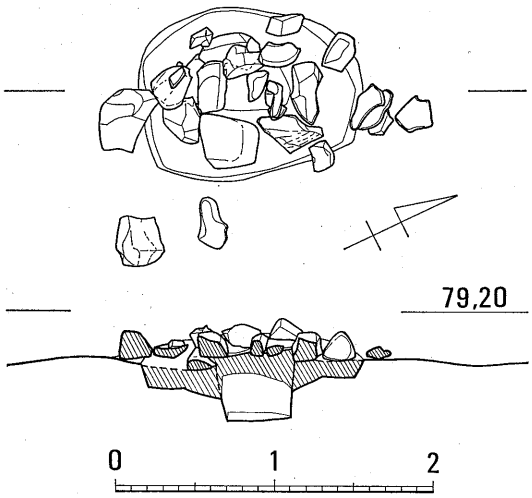


第11図　銅　鏃　実　測　図（縮尺1/2）



第12図　銅鏃・鉄鏃・鉄斧・鉄鋸実測図（縮尺1/2）

べ著しく豊富である。本墳遺物出土状況は鉄剣がそれぞれ反対方向を向き、鏃もまた３・４と他のものも反対方向を向く。このような埋置状態は埋葬された人間の数も問題となろうが、棺の規模も2.5m×0.6mほどで１体としておきたい。内部主体には鉄鏃茎や靫の破片が飛び散っている。攪乱なども考慮する必要があり、棺中央の銅鏃が原位置を保つか否かも判別しえない。



第13図　集石実測図（縮尺1/60）

次に銅鏃と鉄鏃についてであるが、３・４を除く銅鏃は鉄鏃と一括して収められており、特別な意識の差は認められず、実用品として用いられたものである。これに対し３・４は靫に入れられ、大形で形態的にも特異であり、他の銅鏃と分けて埋置されている点から儀仗用のものと考えられる。

阿志岐古墳群B群26号墳出土銅鏃計測値一覧表

	全長	身部					茎部	
		長さ	最広巾	長狭巾	最大厚	基部厚	長さ	径
3	84	55	21.3	16	5.8	5.8	29	4.8
4	83	55.2	23	16	5.8	5.2	27.8	4.6
5	44	28	14.8	14	4	4.2	16	(3.2)
6	49.5	30	(14.8)	(13.3)	4	4.5	19.5	(3)
7	51	33	15	12.8	4	5	18	4.2
8	49.5	34	14	12.8	3.9	5	15.5	4
9	51.3	33	17	13.8	4.9	5.2	18.3	4
10	52	34.2	(16)	(13)	4.9	5.5	17.8	4
11	51.9	34	17.1	13.5	4.5	5	17.9	4.1
12	50.8	32	(14.4)	(13.3)	4.5	5.2	18.8	3.9
13	49	36.5	18	13	4.8	5.1	12.5	4.2
14	55.8	39	(16.1)	(14)	4.8	5.5	16.8	4.4
15	59	41	(16)	(15)	4.6	5.5	18	4.1
16	52.8	36.5	(17.2)	15	5	6.4	15.3	4.5
17	60	34	18.2	13	5.2	6	—	—
18	55	35	(17)	(12)	5	5.2	20	4
19	54	38	16.5	12.2	5.5	6	16	4
20	55	37.5	17.2	12.8	6.2	5.8	17.5	4
21	54	37	17	12.2	5.8	5.8	17	4
22	54.2	39	(16)	(12)	6	6.3	15.2	4.8
23	52	38	(15.2)	(11.5)	6	6.3	14	4.5
24	54	38	(16.5)	(11.8)	6.1	7	16	4.5
25	41.2	29	—	—	—	—	(12.2)	—
26	65	32	16	—	4.9	6	—	—
27	77.5	37.7	—	—	5.8	—	—	—
28	73.5	34.3	15.3	13	4.8	—	—	—
29	52.2	34	18	14	5	5	18.2	4
30	90	39.5	18	13	—	—	—	—
31	74	37	16.2	12.2	—	—	—	—

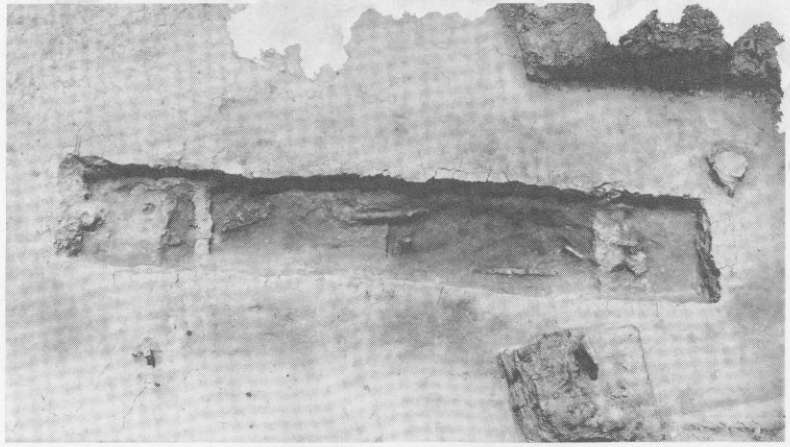
単位mm　（　）内は残存計測値

図　　版

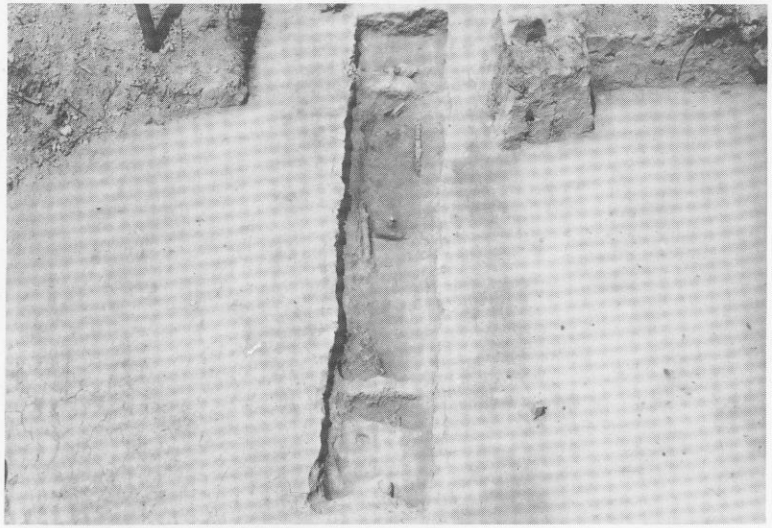
1　古墳遠景（北西より）

2　古墳近景（南より）

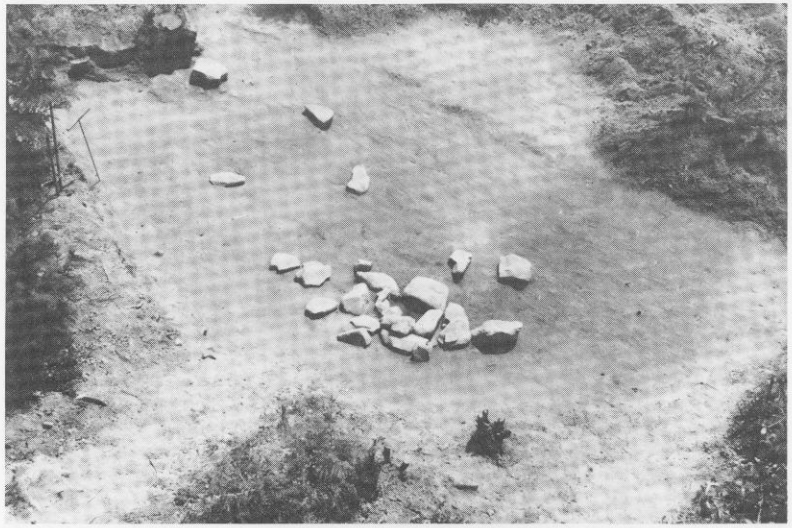
1　古墳全景（東より）



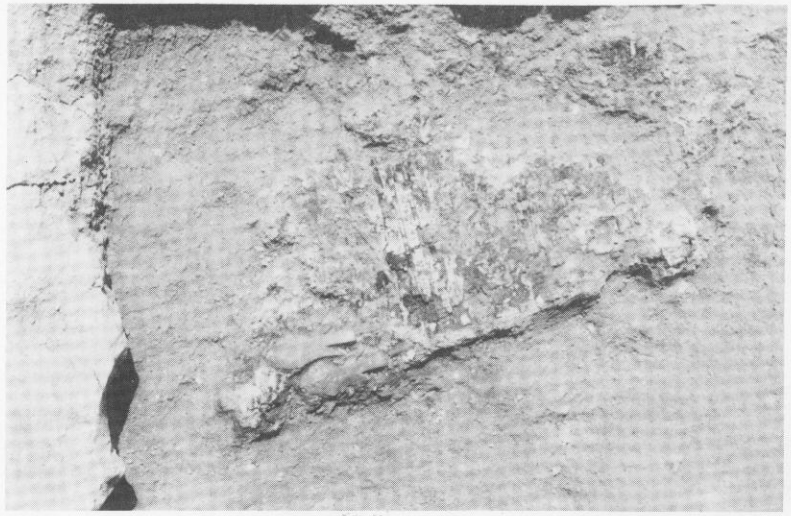
2　主体部（北より）



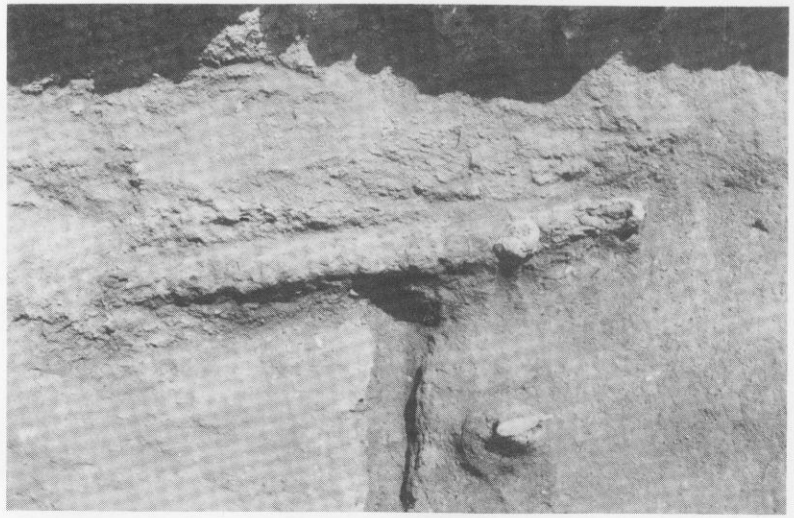
3　主体部（東より）



4　集石（西より）

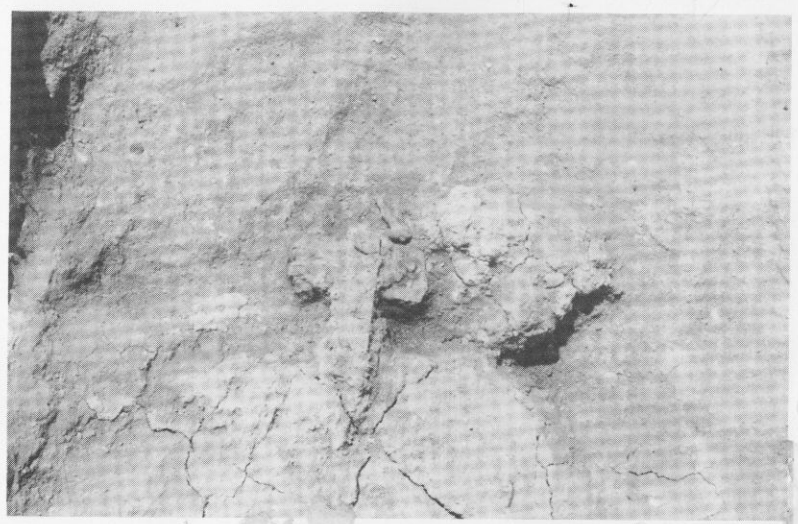


銅鏃（3・4）・靫出土状況



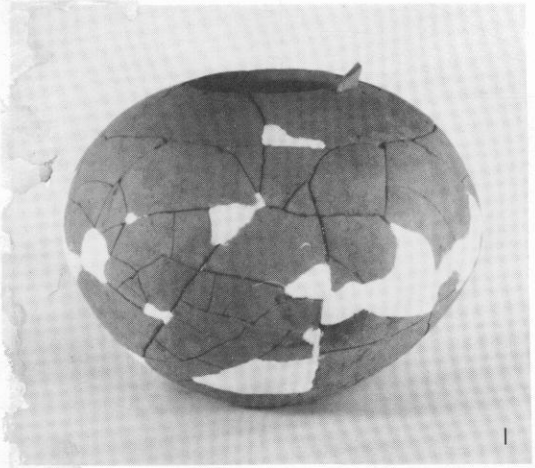
鉄剣（1）出土状況

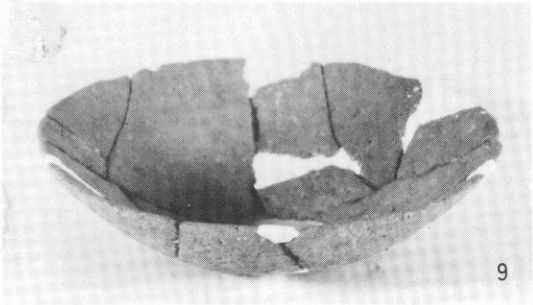
鉄剣（2）出土出土状況

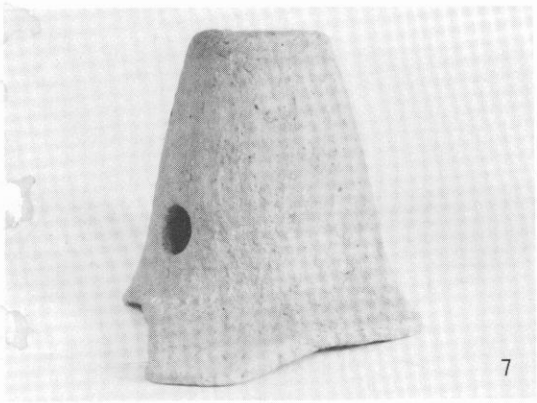


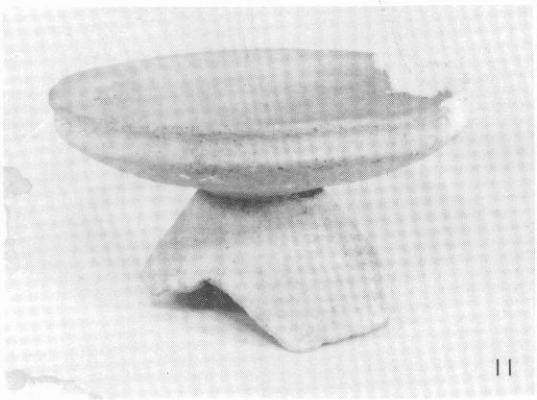
鉄斧・[illegible]鋸出土状[illegible]

図版

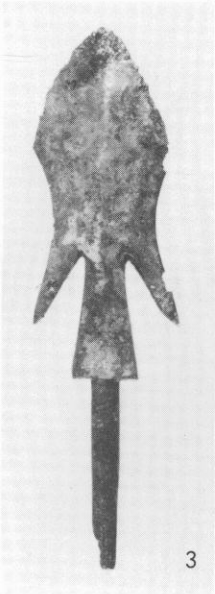








土器　挿図第８・９図番号に同じ
鉄器　挿図第10～12図番号に同じ


3

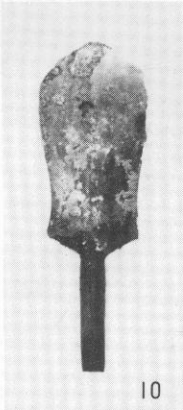
4

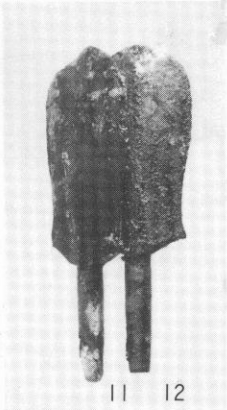
5 6

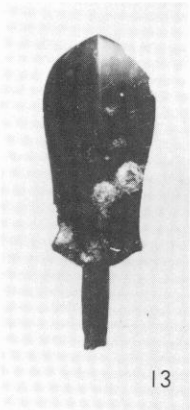
7

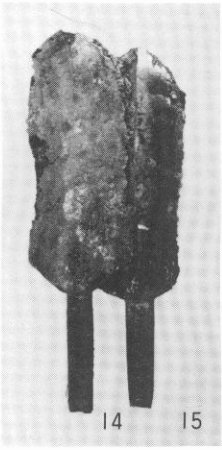
8

9


10

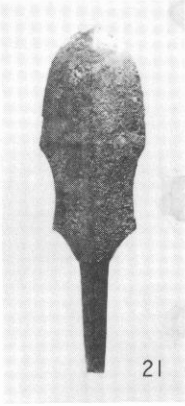

11 12


13

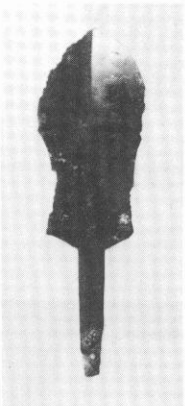

14 15

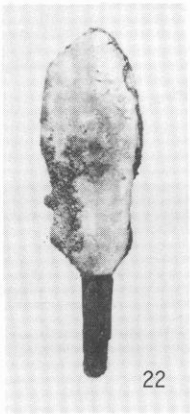
19

20


21

17



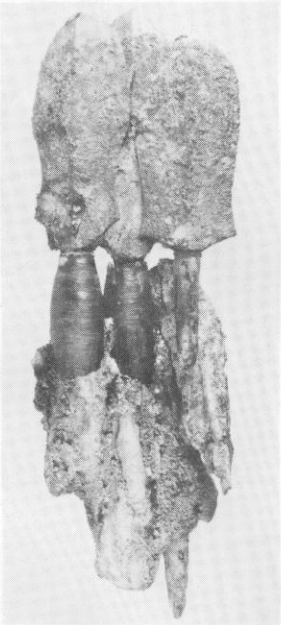

22

23

24

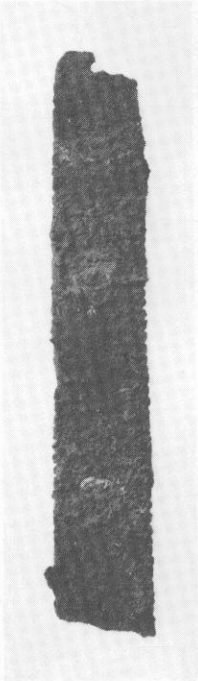
銅鏃（25～28）

鉄鏃（32～37）

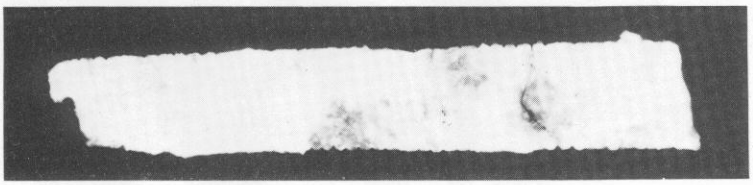


銅鏃・鉄鏃（29～31, 38）

鉄斧



鉄鋸



鉄鋸X線写真

阿志岐古墳群 II

筑紫野市文化財調査報告書
第 12 集

昭和 60 年 3 月 30 日

発行　筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753の1

印刷　正光印刷株式会社
福岡市西区徳永877の1